

高校国語「言語文化」教科書9社17冊の検証 ——アダプテーションという〈伝統〉が支える連続史観——

木村 陽子 (大東文化大学文学部)

Review of 17 high school textbooks “Japanese Language Culture” from 9 companies

— Continuous historical view supported by adaptation as “tradition” —

Yoko KIMURA

1. はじめに

2006年に教育基本法が改定されるまでの高校国語科の学習指導要領では、それまでの日本文学研究において主流であった日本文学史の捉え方が踏襲されている感があった。具体的には、《古代より中国文化の受容と変容とを繰り返しながら日本独自の文化が築かれてきたところへ、近代以降、西洋文化の流入によって大きな文化的分断が生じ、長く保たれてきた日本の伝統文化が断ち切られた》と見るような「断絶史観」的な捉え方である。

日本の国語教育ではそうした捉え方を基本的にはベースとし、江戸と明治のあいだに線引きをするかたちで「古文」と「現代文」を教材として長く区別してきたのだが、そこには「断絶史観」と単純には言い切れない複雑な問題もあった。たとえば、1952年に国文学者の吉田精一が「新制高校の上級生や、新制大学の教養学科の人達を対象に」書いたという『近代日本文学入門』（要書房）には、近代日本の思想・文化の特徴が次のように記されている。

東洋の国々の中で、西洋の思想、文化を、日本ほど熱心に、無批判にうけ入れた国はないので。その結果として、どの国よりも早く立憲政治を確立し、資本主義の経済様式をとり入れ、文化全般にわたって、西洋のものを消化しようとしてつとめたのです。明治時代に於て、わが国がヨーロッパの文明、文化を受け入れた有様は、上代日本が中国文明をとり入れた状態に比較されます。併し、この二つの場合には、少くとも現在までのところ、大きなひらきがありました。上代日本が中国文化からうけ入れたものは、長期間にわたったものとはいえ、宗教上、学問上、道徳上の基礎になるものでありました。けれども、近代日本が西洋からとり入れたものは、何よりもヨーロッパの物質文明の近代的成果——すなわち、近代的産業及び技術、資本主義、法律、軍隊組織、及び科学的研究法などを主なものとします。もちろんこれだけでも相当の文化を創造するに十分でないことはありません。しかし精神の方面に於ける最も重大なものというべき、ヨーロッパ的な「自由」の精神と、それにもとづく美的文化の創造は、これらによっては十分に得られなかつ

たのです。日本人本来の人間生活、物の感じ方、及び考え方、風習、物の評価の仕方などは、そうしたヨーロッパ的なものの進入にもかかわらず、比較的もとのままに残っていたし、今でも幾分残っています。(203・204頁、下線引用者)

つまり、近代日本は東洋一「熱心に」、「無批判に」、西洋文化を受け入れ、物質面での近代化にいち早く成功したが、上代の日本が中国文化を物質・精神ともに巧みに自国の文化に取り入れたのとは異なり、《精神面での近代化（西洋化）は不徹底であった》といった認識である。ここには、日本人の西洋化の完遂を是とするような自国に対するネガティブな捉え方が表れており、その意味で「自虐史観」的ともいえるが、こうした自国に対する認識を基底としながらも、内容的には「写実主義」、「浪漫主義」、「自然主義」、「耽美派」、「白樺派」、「プロレタリア文学」、「ダダイズム」、「未来派」、「新心理主義」など、西洋文化の日本への反映を主として記述していく、主義・流派の紹介型の日本文学史が長く流通してきた。

しかしながら、2006年の改定教育基本法を契機として「連続史観」が強調されるようになった。つまり、「近代化の不徹底」を欠点と見るような捉え方から一転、《日本人の感受性や伝統文化の独自性が失われずに、現代まで保たれている》とポジティブに捉え直すような「連続史観」が、高校国語科において積極的に打ち出されるようになったのである。

1949年に教育基本法が制定されて以来、初めての、そして全面的な改定となった新たな教育基本法では、旧法の前文には記載がなかった「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育」の推進が前文に記載されたが、それにより「これまでに培われた伝統や文化を踏まえ、さらに発展させ」、「新しい文化を創造」させるという目標が再設定された（同法第2条）。そして、国語教育においても、これまでの「断絶史観」を払拭しての「連続史観」へのパラダイムチェンジが進められてきたのである¹。

その第一歩が、すでに2009年に刊行された文部科学省「高等学校学習指導要領解説国語編」（以下、「解説2009」）に表れている。「我が国の言語文化の特質」として、次のように記されている。

「言語文化の特質」とは、我が国の言語文化の独自の性格やその価値のことであり、微視的には、作品一つ一つに表れた個性と価値、巨視的には作品を集合的にとらえた時代全体の特質、さらに近現代につながる我が国の文化全体の独自性のことであり、ここでは主に古典を教材とした指導を通して、生徒にそれに気づくことを求めている。(29頁、下線引用者)

この記載は、最新の「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説国語編」（以下、「解説2018」）にもそのまま引き継がれている（118頁）。これまでも高校国語科の学習指導要領には「言語文化への関心を深める」ことが明記されてきたし、また、一つ前の学習指導要領では改定基本法の「伝統」重視の姿勢を反映して〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が小中高を通して設定されたが、最新の学習指導要領ではその傾向がいっそう強められ、ついに、日本の「言語文化の特質」を最も重要な指導事項として据えた「言語文化」が、高校の共通必修科目として新設されるに至ったのである。

以下、本論は、この「言語文化」の教科書として文部科学省の検定を通過した9社17冊を分析対象とし、「連続史観」的な言語文化史観の養成を目的とした課題の特徴を明らかにしていく。結論を先取りすれば、各教科書からは、学習指導要領の掲げた目標の実現に向けて、これまで以上に真摯に取り組んだことによる確実な成果を確認することができた。具体的には、高校生に「連続史観」的な言語文化史観を実感させやすい好例として「翻案（アダプテーション）」という〈技法〉を設定し、その理解や習得を目的とした課題が豊富に盛り込まれていることを、網羅的分析から跡づけた。

2. 日本の言語文化の伝統としてのアダプテーション

改定教育基本法により再設定された高校国語科の目標のひとつは、自国の伝統的言語文化を高校生たちに深いレベルで理解させ、「新しい文化」の「創造」者へと導くことにある。それは、生徒たちが将来、海外で日本文化の独自性を、自らの言葉で、誇らしく語れるようになれば、日本人としてのアイデンティティも強化されるだろうといった発想からきているようであり、生徒に自国の伝統文化の継承者であるという自覚を持たせることに主眼が置かれている。

しかし、限られた授業時間で、そのような壮大な目標を実現するのは容易ではなく、国語教師が納得のいく指導を行えるような教材レベルでの抜本的な改革を必要とした。その経緯については、別稿で何度か論じたので割愛するが²、結論をいうと、高校生の誰もが理解できるような指導事項の〈単純化〉と、「まさしくこれが日本文化全体の独自性である」と、国語教師が自信をもって解説できるような〈見本〉が必要であり、その指導しやすい〈見本〉として採用されたのが「翻案（アダプテーション）」という〈技法〉であった。「解説2018」では、「言語文化」の教材の性格が次のように説明されている。

「言語文化」で教材とする作品や文章は、他の複数の作品と関わりをもって成立していることが少なくない。例えば、近代以降の小説の中には、古典の説話や中国の伝奇小説を基にしたものもあり、小説とその典拠と比較しながら読むことによって、より内容の解釈を深めることができる。(130頁)

我が国の言語文化においては、しばしばこうした翻案が新しい言語文化を担う行為として機能してきた。口承文芸だけでなく、和歌や本歌取りや謡曲などもまたその産物といえる。近世や近代以降の小説の多くもまた我が国や中国の伝統的な言語文化を基にしていることは言うまでもない。(193頁)

日本の言語文化においては、過去の時代において規範となった古典をベースに新たな作品を創作し、リプロダクションするという意味での翻案という技法から生み出されることが多い。言い換えれば、個々の作品ではなく、むしろその技法である翻案（アダプテーション）こそが、古代から現代まで連綿と受け伝えられてきた日本の言語文化の象徴であると述べているのである。

前述したように、日本の近代文学史が長く西洋文化の日本への〈反映〉を主たる記述内容として

きたのに対し、「連続史観」に基づく記述においては、自国の伝統文化との〈つながり〉が強調される。問題は、その過去と現在とをつなぐ伝統を何とするかである。日本の伝統文化の特徴といえ、ば、「もののあはれ」や「さび」といった美的理念などが想起されやすいが、関連する作品を読み、そのような抽象的概念から説き起こして生徒を「継承者としての自覚の育成」にまで到達させることは容易ではない。

これに対し、「翻案（アダプテーション）」は、あくまでも「技法」である。その点からも再現可能性の高さにおいて優位性があり、学習者に取り組みやすい。高校生たちは国語教科書の中に設定された豊富なアダプテーション課題に取り組むことで、「日本の言語文化の特質は翻案である」と実感をもって答えられるようになり、さらには、その技法を用いて簡単な創作ができるようになる。そのような教育プログラムの実践を、文部科学省は高校の共通必修履修科目として新設したのである。

教科書の分析に入る前に、改めて、文学研究における「アダプテーション（adaptation）」の定義を確認しておく。アダプテーションの語は、一般に、先行する他者の創作物の大筋を借りて、後進のクリエイターが独自の創意を加えて改作する意味で用いられるが、2000年以降の文学・文化研究の潮流においては、次のような広範囲の作品変換を意味するようになった。

- (1) 小説の映像化、映画の舞台化、演劇のテレビドラマ化のようなメディアを横断する変換
- (2) 古典を現代の物語へ、または、海外の話を自国の話へ置き換えるような、時代・地名・風俗・人物設定などの変換
- (3) 逐語訳よりも自由度の高い翻訳、創作的翻訳
- (4) 過去に制作された作品のリメイク

欧米でのアダプテーション研究が活発化したのは1950年代で、当初は小説など文字メディアの映画化の分析が中心であったとされ、後発の翻案作品が単なる原典の改作か副次的なものとして低く扱われる傾向があったという。しかし、2000年代に入るとリンダ・ハッチオン³やジュリー・サンダース⁴などによってアダプテーションの理論化が進み、すぐれた翻案作には原典と同等の地位があるとみなされるようになり、アダプテーションという行為自体も原典に対する〈創造的な解釈〉であるとポジティブに評価されるようになったという⁵。

一方、日本では古代以来、前代の文化を尊重し、継承しつつ、そこからそれぞれの時代に合った新たな価値を発掘し、意味や意義を再創造していくような気風があった。そのため翻案作を原典よりも低く見るような価値観は、著作権概念が浸透しはじめる近代に至るまでは、欧米ほどには生じにくかった。坂東敏子は、日本では西欧の様式史のように「ルネッサンスからバロックへ」というような大きな時代的転換が、文化全体にわたっては見られにくく、日本文化の独自性は、「あるものを、先にあるものに託して、新しい表現を行う」という、『重ね焼き』の構造にあると指摘している⁶。

その傾向を顕著に示しているのが勅撰集の伝統である。たとえば、古今和歌集の「古今」という言葉は「古を仰ぎて今を恋」ふ心、つまり、過去の勅撰集から漏れていた古歌の秀逸を拾い上げて再評価するとともに、当代の文学趣味の正当性をも保証するという編纂方針を示している。丸谷才一は、「そこでは自分の生きる時代の価値が強引に主張されるのではなく、常に、過去という典拠

を引合いに出す優雅な方法で語られる」のだと述べる⁷。大岡信は、「大和魂」の解説として、「元来は、中国のものと日本のものとうまく折衷できるということだった」が、そこから転じて、「なにかあったときに臨機応変に知っている詩句をちょっと変えて合わせて答えたりすると、立派だということになった」。特に平安時代は「唐と日本の文物の融合が非常に成功」した時代であり、「文物、思想を融合することにかけて、平安時代の連中は天才だった」と述べている⁸。

こうした古代以来の文化的土壌が日本で「翻案」を盛んにした要因であると考えられ、古典が後世に至り新たなメディアに変換され、再創造されるということが日本では頻繁に行われた。小峯和明は、このような古典の「翻案化現象」を『源氏物語』を例に、次のように説明している。

『源氏物語』はすでに十二世紀の平安末期には絵巻が作られた。豪華な装飾料紙に名筆家の書いた詞書と宮廷の専属絵師が画いた絵画とが総合された逸品である。また、同時代の仏教界では、紫式部が『源氏物語』の作者として男女の恋愛や愛欲の業を書いた報いで地獄に堕ちるという説がひろまった。そのため、『法華経』を写経して供養する法会を開き、地獄の紫式部を救済しようとする「源氏供養」が実際に行われた。(中略)中世になると「源氏供養」はそのまま能の曲目になり、舞台芸として演じられたり、御伽草子の絵入り本として読まれたりした⁹。

このように、日本においては翻案が単なる創作技法というだけでなく、文化的独自性として歴史的に捉えられてきたという事実が、2006年の改定基本法を契機とした、自虐史観を脱し、自尊重視のともいえる、〈連続史観〉的な言語文化史へのスムーズな書き換えを可能としたと考えられる。次節では、このような日本特有の翻案(アダプテーション)をポジティブに捉える視点が、新しい学習指導要領の下に編纂された高校の国語教科書、特に『言語文化』の中で、どのように展開されているかを確認していきたい。

3. 『言語文化』教科書に見られるアダプテーション課題

2022年度の新入生から全面実施されている高校国語科の共通必修履修科目「言語文化」では、9社17冊の検定通過教科書が現在使用されている。稿末の「別表1」に示されるように、各社の創意が加えられた教科書にはアダプテーション課題が計175例も盛り込まれている(詳細は、稿末「別表2」を参照されたい)。その内容を大別すると、次の7つのカテゴリーに分類できる。

- ①メディア：異なるメディアに展開される翻案
- ②現代化： 古典を現代の物語に置き換えるような翻案
- ③リライト：文章の一部の書き換え・書き足し
- ④翻訳： 逐語訳ではない創作的翻訳
- ⑤本歌： 「本歌取り」を用いた和歌の創作
- ⑥比較： 翻案作品と原典との比べ読み
- ⑦事例： 翻案化事例の紹介や自身での調査

右の「表1」は、稿末の「別表1」の結果を、さらに出版社別に集計し直したもののだが、課題によってその頻度が異なっていることが見て取れる。全9社17冊の『言語文化』教科書のすべてに見られた課題が「⑥比較」と「⑦事例」であるが、実際の課題の設定の仕方は出版社によってさまざまである。

各社が提示したアダプテーション課題の内容的な多様さを示す意図から、ここでは『平家物語』に設定された課題例を取り上げてみたい。

東京書籍『精選 言語文化』では、『平家物語』の派生作品として、能9作、浄瑠璃・歌舞伎4作、近代の小説7作を紹介したうえで、「『平家物語』を素材とした作品を、『平家物語』本文と読み比べよう」(204-206頁)という「⑦事例」(翻案化事例の紹介や自身での調査)に分類される課題を設定している。

大修館・文英堂・三省堂も、『平家物語』に「⑦事例」の課題を設定している。たとえば、大修館『新編 言語文化』「読んでみよう」(206頁)では、本文と派生作品との比較調査を高校生が取り組みやすいように、絵本や漫画や現代語訳が紹介されている。これに対し、文英堂『言語文化』では、「参考」と題されているが、「木曾の最期」の場面を扱った能「巴」の詞章が3頁にわたり紹介され、高レベルの比べ読みを課している(118-121頁)。これらに対し、三省堂『精選 言語文化』では、あえて派生作品を教科書の中で紹介せず、「『平家物語』を題材として作られた後世の作品には、どのようなものがあるか。さまざまなジャンルにわたって調べ、その内容を発表してみよう」(105頁)と、生徒自身に一から調べさせる課題を設定している。本稿では便宜上、アダプテーション課題を7つのカテゴリーに分類しているが、同じカテゴリーに分類される課題であっても、かなり違いがあることが以上の例からも分かるだろう。

また、「木曾の最期」に創作課題を設定している教科書もある。明治書院『精選 言語文化』では、「木曾の最期」を脚本化し、「演じてみよう」(98頁)という「①メディア」(異なるメディアに展開される翻案)に分類される課題を設定している。第一学習社『高等学校 言語文化』・『高等学校 精選 言語文化』でも、「義仲が巴にかけた言葉について、言葉にしていけない思いも想像して、せりふの形で書いてみよう」という「③ライト(書き足し)」に相当する創作課題を設けている。他方、同じ第一学習社でも『高等学校 標準 言語文化』では、「宇治川の先陣」と中山義秀や古川日出男による現代語訳が併記され(179-183頁)、「⑥比較」(翻案作品と原典との比べ読み)をさせる課題が設けられている。以上、『平家物語』だけを見ても、設定されたアダプテーション課題は各社各様であることが分かるだろう。

次に、各課題を量の点から比較してみる。「表1」及び「別表1」に示されるように、「⑥比較」(32%)と「⑦事例」(22%)が突出して多く、9社17冊のすべてに設定されている。最も頻度が高かった

表1 『言語文化』教科書出版社別「アダプテーション」課題数

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	計	
	メディア	現代化	ライト	翻訳	本歌	比較	事例		
東書		1	2	1	4	2	7	5	22
三省堂			2	5	1	1	6	5	20
大修館	1	2			2		9	12	26
数研		4	6	3	2	14	8	37	
文英堂			1				1	1	3
明治	7			2	2		2	1	14
筑摩	3	1	2	2			6	2	16
第一	1	4	6	1			7	4	23
桐原	2	4	3				4	1	14
計	15	20	25	15	5	56	39	175	
比率	9%	11%	14%	9%	3%	32%	22%	100%	

のは「⑥比較」であるが、「別表2」のとおり、特に数研出版『言語文化』と『高等学校 言語文化』、および筑摩書房『言語文化』においては、1冊中に6例も比べ読み課題を採用している。以下は、数研出版『言語文化』の「⑥比較」の課題例である。

- I) 『伊勢物語』「筒井筒」と『大和物語』「沖つ白波」の比べ読み (67-69 頁)
- II) 『奥の細道』「平泉」中の句 (五月雨の降り残してや光堂) の初案と定稿の比べ読み (125 頁)
- III) 在原業平の和歌 (ちはやふる神代も聞かず竜田川) とその英訳詩の比べ読み (131 頁)
- IV) 「羅生門」結末部の初稿と定稿の比べ読み (216 頁)
- V) 「羅生門」と『今昔物語集』の素材となった箇所(1)の比べ読み (221-223 頁)
- VI) 「山月記」と『人虎伝』の素材となった箇所(2)の比べ読み (308-309 頁)

他方、筑摩書房『言語文化』の課題例は次のとおりである。

- i) 『竹取物語』と絵本『かぐやひめ』の比べ読み (56 頁)
- ii) 『方丈記』「ゆく河の流れ」と漢詩文「歎逝賦」の比べ読み (84 頁)
- iii) 『新古今和歌集』藤原家隆の和歌 (志賀の浦や) と本歌の比べ読み (117-118 頁)
- iv) 孟浩然「春暁」とその翻訳詩 (井伏鱒二・土岐善麿) の比べ読み (187-188 頁)
- v) 「羅生門」と『今昔物語集』の素材となった箇所(2)の比べ読み (246 頁)
- vi) ティム・オブライエン「待ち伏せ」の原文 (英語) と村上春樹の日本語訳の比べ読み (246 頁)

特に、高校国語の定番教材である芥川龍之介「羅生門」と『今昔物語』の素材となった箇所を比べ読みさせる課題は、17冊中16冊で確認された¹⁰ (右の「表2」を参照)。

なお、原典との比べ読みとしては、いまひとつの定番教材である中島敦「山月記」の掲載は『言語文化』では3冊にとどまったが、高校2-3年生用の教材である『文学国語』の方で11冊すべてに掲載されていた。(右の「表3」を参照)

表2 『言語文化』教科書(2022年度/9社17冊)掲載 文学者ベスト9

順位	作家名	採択教科書数	教材名()は内訳
1	芥川龍之介	16	羅生門 (16)
2	中原中也	11	サーカス (6) 一つのマルヘン (5)
3	茨木のり子	8	六月 (3) 自分の感受性くらい (3) 涙む (1) わたしが一番きれいだったとき (1)
4	村上春樹	7	鏡 (4) 青が消える (3)
4	吉野弘	7	I was born (7)
6	夏目漱石	6	夢十夜 (6)
7	高村光太郎	5	冬がきた (2) 道程 (2) 樹下の二人(1)
7	島崎藤村	5	小諸なる古城のほどり (5)
9	太宰治	4	富嶽百景 (1) 葉桜と魔笛 (1) 待つ(1) 狼が島(1)
9	川上弘美	4	神様(1) 水かまきり(1) 離さない (1) ほねとたね (1)
9	室生犀星	4	小景異情 (4)
9	中島敦	4	山月記(3) 名人伝 (1)

表3 『文学国語』教科書(2023年度/9社11冊)掲載 文学者ベスト6

順位	作家名	採択教科書数	教材名()は内訳
1	中島敦	11	山月記 (11)
1	夏目漱石	11	こころ (11)
3	宮沢賢治	9	永訣の朝 (9)
4	安部公房	8	靑(5) 赤い罌 (2) 棒 (1)
4	角田光代	8	旅する本 (2) 鍋セット (2) そとみとなかみ (1) ランドセル (1) 私たちの黄色 (1) あの朝 (1)
6	森鷗外	7	舞姫 (7)
6	梶井基次郎	7	檸檬(7)

その他、「⑥比較」で特筆すべきものとしては、大修館『新編 言語文化』の菊池寛「形」と江戸中期の逸話集『常山紀談』の比べ読み、同、古典落語「蔵前駕籠」と『今昔物語集』「阿蘇の史、盗人にあひてのがること」の比べ読み、数研出版『新編 言語文化』の古典落語「まんじゅうこわい」と中国明時代の笑話『笑府』の比べ読み、桐原書店『探求 言語文化』の浅井了意『伽婢子』「怪を語れば怪至る」と中国の逸話集『龍城録』の比べ読みなどがあり、各社の個性が出ている。

次に、全体の22%を占める「⑦事例」について確認すると、「別表1」に見るように、大修館の『言語文化』と『新編 言語文化』における各6例が最も多かった。たとえば、『新編 言語文化』では、次のような課題が確認された。

- a) 『今昔物語集』の派生作品の紹介(99頁)
- b) 『枕草子』「春はあけぼの」の現代語訳や派生作品の紹介(184-185・188頁)
- c) 『伊勢物語』の派生作品の紹介(198頁)
- d) (前掲)『平家物語』の派生作品の紹介(206頁)
- e) 『源氏物語』の派生作品の紹介(209頁)
- f) 『三国志』の派生作品の紹介(266頁)

その他の教科書も、『竹取物語』、『伊勢物語』、『源氏物語』、『今昔物語』、『平家物語』などの定番古典で「⑦事例」を設定していることが多い。この課題には、すぐれた古典が後世の創作物に影響を与え続けてきたことを具体的に示す文章を読ませることで、「近現代につながる我が国の文化全体の独自性」を生徒に気づかせるねらいがある。その意味で「⑦事例」は、「連続史観」教材の最もスタンダードな形式であるともいえる。

一方、7つの課題のうち、残りの①から⑤に分類される、生徒自身による創作を求める課題の採択数は、5つの課題を合計しても80例(全体の46%)にとどまった。特に、学習指導要領「書くことの言語活動例ア」の中でも言及され(53-54頁)¹¹、「解説2018」でも、「その効果を期待して文章や作品を書く際に使ったりすることができるようにすることが重要である」(116頁)と指摘されていた本歌取りを用いた和歌の創作が、7つの課題の中で最も低い、3社5冊(全体の3%)にとどまったことは問題視されてよい。

そもそも、「本歌取り」とは「有名な古歌の表現を取り用いて自歌を構成し、その古歌の世界を背景にして、表現・情調の重層化・複雑化をはかる表現手法」¹²であり、そのため、数研出版の『言語文化』と『高等学校 言語文化』でも、「『万葉集』から『新古今和歌集』までの教科書掲載歌を本歌とした短歌を創作してみよう」という課題を設定している。本来、これは最もオーソドックスな課題形式であるといえるが、しかし、初心者である高校生が古歌の例をいくつか解説されただけで、それを真似て、本歌取りを用いた短歌をすらすら詠めるかといえ、実際には容易ではないだろう。

一方で、「本歌取り」には「パロディ」に近い側面もある¹³。「秋の田のかりほの稲の出来すぎてわが衣手に質をおきつつ」や、「春すぎて夏来てみれば米値段 次第にやすくあたまかく山」といった狂歌があるように、江戸時代には『古今和歌集』や『小倉百人一首』の古歌を踏まえた狂歌や落

書などが少なくなく、そのことから本歌取りの手法が江戸時代には庶民レベルにまで浸透していたとする青木美智雄の指摘もある¹⁴。そうした庶民レベルでの本歌取りの享受の仕方に近いかたちで、まずは「本歌取り」の形式だけを活用してみようというのが、次の東京書籍『精選 言語文化』に収録された「フレーム短歌を作る」(178頁)の趣旨であろう。本教材では、光孝天皇の和歌「君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ」に倣い、「君がため」「わが」「つつ」をそのまま同じ位置に置いて、フレーム短歌を作ろう」という課題が設定されている。以下は、「作品例」として教科書が挙げている例である。

<本歌>

・君がため春の野に出でて若菜摘む / わが衣手に雪は降りつつ

<フレーム短歌の作例>

・君がためライブの席を予約する / わがチケットは取りはぐれつつ

・君がため秋の林に栗拾う / わが靴底はイガを踏みつつ

(※引用者注、塗りつぶしは引用者)

「フレーム短歌」のような試みは、必ずしも本歌の趣旨を踏まえたうえでの共鳴がない、といった批判もあるかもしれないが、教員の骨折りに配慮して課題を設けないという選択をするよりは、とにかくも創意工夫によって、学習指導要領の趣旨に沿った、本歌取りを用いた創作を教材化していきこうという東京書籍の方針は、今後の進むべきひとつの方向性を示すものとして注目される。

また、課題数こそ15例(全体の9%)と少ないが、9社中6社が工夫を凝らした課題を掲載しているのが、「①メディア」である。たとえば、筑摩書房『言語文化』では、『十訓抄』の「大江山」の原文を読ませた後に、次のような斬新な課題設定があった(同教科書34頁「レッスン：四コマ漫画を描こう」)。

「大江山」を題材にした左の四コマ漫画のふきだしに、場面に即したせりふを現代語で書き込んでみよう。原文では長い説明の部分を、短くまとめよう。



<アドバイス>

- ・内容やせりふのどの部分を残し、どの部分を省略するか、意識しよう。
- ・原文には書かれていないせりふも、場面を想像しながら書き込んでみよう。

この課題は、古典の中にあるコミカルな面白さを、漫画という手法で味わい直させる好事例と言える。このワークの後に、さらに「発展」として、「古文を題材にした近現代の小説や漫画を読み」、(中略)「読んだ作品の印象的な場面を四コマ漫画にまとめよう」といった、生徒自身に四コマ漫画を描かせる課題も設定されており、高校生の関心を引くための工夫がなされている。

他方、「①メディア」課題15例中の7例を占め、このカテゴリーにおいて突出しているのが明治書院『精選 言語文化』である。以下は、同教科書に収録された「①メディア」の例である。

- A) 「木曾の最期」を脚本化し、演じてみよう。(98頁)
- B) 「断腸の思い」という表現を用いて小話を作ってみよう。(130頁)
- C) 故事成語の一つを選び、「五・七・五」にして発表し、互いの作品を鑑賞し合おう。(132頁)
- D) 小説などのフィクションの効果を考えるための方法として、模擬裁判を行ってみよう。(中略) 検察官・弁護士・裁判官(陪審員)に分かれ、小説(「羅生門」や「城の崎にて」)を調書に見立てて、登場人物の言動などを吟味し、原告・被告それぞれに寄り添いながら議論に参加してみよう。(208頁)
- E) 「写真班」(梅崎春生)を、漫画にするとしたら、または、コントとして演じるとしたら、どんなものになるだろうか。(232頁)
- F) 本文(川上弘美「離さない」)の描写をもとに、「人魚」の絵を描いてみよう。(255頁)

一見して〈演劇的課題〉や〈図絵的課題〉が多いことが分かるが、これらは「文学国語」の「読むこと」の「言語活動例ウ」¹⁵の内容を先取りしたものである。特に、上演を見据えた〈小説の脚本化〉は、一つ前の学習指導要領では高校1年生を対象とした「国語総合」の「読むこと」の「言語活動例ア」¹⁶として設定されていたが、当時、「国語総合」の検定に通過した9社24冊のうち、「文章の脚本化」を課題として教科書に盛り込んだのは、明治書院1社であった。そして、今回の「言語文化」でも、実演を前提とした物語の脚本化を課題としたのは、9社17冊中、上記明治書院の例の他には、大修館『新編 言語文化』の「兄のそら寝」(「兄の考え、僧たちの考えや会話を想像し、せりふやナレーションをつくって朗読劇にしてみよう」、160頁)のみであった。さらに、明治書院『精選 言語文化』では、①から⑤の創作課題を計11例(17冊中トップ)確認し、創作に秀でた教科書会社であるという認識を再確認した。

他方、明治書院とともに創作課題で精彩を放っているのが、桐原書店『探求 言語文化』である。本教科書では、「①メディア」が2例、「②現代化」(古典を現代の物語に書き換えるような翻案)が4例、「③リライト」(文章の一部の書き換え・書き足し)が3例と、創作課題が計9例あった。特に、「②現代化」の4例(全体の20%)は17冊中最も多い。以下はその具体例である。

- あ) 「兄のそら寝」の話を現代の物語に書き換える形で翻案してみよう。(12頁)
- い) 自分なりの現代版「ありがたきもの」(『枕草子』)を書き、互いに読み合ってみよう。(45頁)
- う) 「芥川」の「白玉か」の歌に込められている、「男」の「女」に対する心情を、口語自由詩として表現してみよう。(66頁)

え) 思い出に残る情景を、「奥の細道」各章の表現上・文体上の工夫を参考に、現代語で書いてみよう。また歳時記などを参照して、俳句も書き添えてみよう。(109頁)

難易度は決して低くはないが、教材のジャンルが説話、随筆、歌物語、俳諧紀行文と多岐にわたっており、意欲的なアダプテーション課題となっている。しかも、桐原書店は「③リライト」(文章の一部の書き換え・書き足し)課題においても個性を発揮している。以下はその具体例である。

- ア) おしどりの雄鳥を殺した鷹使いの立場から、雄鳥を追って自害した雌鳥に手紙を書く。(『沙石集』「鷹使いの見た夢」(24-25頁)⇒書き足し(手紙文))
- イ) 自分以外の誰か(友人や家族など)の立場に立ち、その人物の視点から、自分の日常生活で起きた出来事を現代語で書く。(『土佐日記』「門出」(50頁)⇒書き換え(視座転換))
- ウ) 地の文に描かれている「女」の行動に着目し、時代を超えた友人という立場から「女」に手紙を書く。(『伊勢物語』「梓弓」(76-77頁)⇒書き足し(手紙文))

以前に桐原書店が刊行していた『新探求 国語総合』では、「書き足し(手紙文)」が2例と内容変更を要求する「書き換え」が宮本輝の短編小説「途中下車」に設定されていたのに対し、『探求 言語文化』で設定されている上記の課題が、すべて古典教材である点は注目に値する。文章の一部の書き換えや書き足しを意味する「リライト」は、翻案技法の一種ではあるが、もとよりそれ自体に「連続史観」を涵養するような効果はない。しかし、テキストを古典に変更し、上記の例に見るように、古典の作中人物に手紙を書かせたり、あるいは、『土佐日記』において貫之が行った視座転換(男→女)を手本として、出来事を「自分以外の誰か」の視点から書かせたりすることは、「解説2018」で示されている「言語文化を生み出した人々のものの見方、感じ方、考え方に触れることを通して、生徒が我が国の言語文化の特質を理解すること」(117-118頁)という「言語文化」の目標にも適っている。

このように、『国語総合』教科書24冊の中に21例確認された「リライト」課題が、その際には古典に設定された課題は教育出版『新編 国語総合』の1例(『竹取物語』書き足し(手紙))であったのに対し、今回の『言語文化』教科書17冊から確認された25例の「リライト」課題のうち、10例(全体の40%)が古典に設定されているのは、前述したような意図からであろう。しかも、残りの15例においても9例が芥川龍之介「羅生門」(8例)と中島敦「山月記」(1例)という古典に関連する近代以降の小説であることから、一見「連続史観」の涵養とは無縁に思える「③リライト」課題においても、「言語文化」という科目の趣旨にできる限り寄せようとする、各教科書会社の工夫の跡を見ることができる。

一方、今一つ注目したいカテゴリーが、「④翻訳」(逐語訳ではない創作的翻訳)である。最新の学習指導要領では、アダプテーション課題の質的多様化を図る目的からか、翻訳に分類される学習課題が新たに加えられた。たとえば、「言語文化」「読むこと」の「言語活動例エ」として、「和歌や俳句などを読み、書き換えたり外国語に訳したりすること(後略)」(133頁)が求められている。

既存の事柄を生かして作り替えることを意味する翻案に対し、翻訳は、ある言葉で表現された文

章を原文に即して他の言語に移しかえることをいうが、その意味では、一般的に翻訳は翻案よりも原文尊重の比重が大きく、アダプターの自由度は総じて小さい。ただし、「解説2018」で「外国語に訳すに当たっては、単純な逐語訳に陥らないような工夫が必要となる」(134頁)と指摘されるように、「④翻訳」は〈創作性が許容される他の言語への移しかえ〉と捉えることができるだろう。ちなみに、「他の言語への移しかえ」とは、具体的には①漢文を日本語、②英語を日本語、③日本語を英語、の3種の翻訳を意味している。特に、②と③は、英語の知識・技能が必要とされるという意味で「合教科」型の課題である。

「合教科型」とは、2020年教育改革によって導入された新しい授業スタイルであるが、「英国数理社」といった個々の教科・科目の範囲内の知識・技能にとどまらず、複数の教科・科目の知識・技能を横断的に組み合わせることを意味している。たとえば、東京書籍『精選 言語文化』では、芭蕉の「行く春や鳥啼き魚の目は涙」と「夏草や兵どもが夢の跡」の二句の英訳を求める課題が設定されているが、この場合、俳句を解釈も含まれた意味の通じる散文に書き換えることを第一段階とし、さらに、その英語訳を第二段階とする、二段構えの「表現」「活用」型の言語活動と位置づけられる。留意したいのは、英語に訳す対象が俳句のような短詩型である点だが、俳句は「省略の文学」と呼ばれるほどに省略を重ねた表現形式であるため、読み手によって解釈の幅が多様なものとなることが想定される。そのため、それほど創意を凝らさなくても生徒たちから提出される回答例が多岐にわたることが予想され、感想の言い合いなど、グループワークをさせやすいという利点がある。

以上、本節ではここまで各出版社から刊行されている『言語文化』の教科書に、合計175例のアダプテーション課題が設定されていること、そして、内容的に7つのカテゴリーに分類される、多種多様な課題が設定されていることを、表でカテゴリー別の頻度を明示しつつ、具体的な課題例も示しながら明らかにしてきた。分析の結果、〈伝統〉として位置づけられたアダプテーションという技法だけでなく、改定教育基本法や、それに続く、新しい学習指導要領の趣旨に沿った、古典と現代を意図的に接続させて、生徒たちに捉えさせようとするような、「連続史観」的な教材を多く確認することができた。

5. 結語

2006年の教育基本法改定および、それに伴い改訂された学習指導要領の趣旨に沿った編纂が求められた高校国語の必履修科目「言語文化」の教科書は、翻案(アダプテーション)という技法を〈伝統〉として捉え直し、「連続史観」的な言語文化史観をより前景化させるという、先例のない難しい要求に応えなければならなかった。その結果、各教科書には、課題カテゴリー間のバランスを欠くと見えるケースもある。例えば、「①メディア変換」のアダプテーション課題を7例も盛り込んだ明治書院は、全教科書で唯一「②現代化」の課題を入れていない。一方、「①メディア変換」、「②現代化」、「③リライト」といった課題を、「文学国語」の課題を先取りして意欲的に9例も盛り込んできた桐原書店も、「言語文化」の学習指導要領にはっきりと明記されている「④翻訳」と「⑤本歌取り」を落としている。あるいは、「⑥比較」と「⑦事例」だけで21例も課題を採用している大修館も、①から⑤の創作系カテゴリーの課題は5例と低調であった。

ただ、総論としては、各教科書からは、学習指導要領の掲げた目標に向けて、これまで以上に真

摯に取り組んだことによる確実な成果を確認することができ、正鵠を得た斬新な課題によって高校生の興味喚起を図ることに成功していると思われる課題も少なくなかった。

改めて「解説2018」の「言語文化」「我が国の言語文化に関する事項」（我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること）の解説を振り返ると、次のように記載されている。

我が国の言語文化への理解とは、上代から近現代までの連続した時間の中で言語と文化の関わりについて、多様な視点で考えたり新たな認識を深めたりすることを指している。（中略）具体的には、同一テーマについて描かれた複数の作品を読み比べ、それぞれの作品の歴史的・文化的背景の違いを考えながら、人間、社会、自然などについて考えたり、当時の人々のものの見方、感じ方、考え方を味わったりすることなどが考えられる。（122頁）

9社17冊の教科書が、この期待や意図にどの程度接近できているかは、今後の効果測定を待たねばならないが、今回検証対象とした教科書は、いずれも、単にアダプテーションという技法が日本の〈伝統〉であることを教え、高校生たちに実際に試させるという域にはとどまっておらず、「上代から近現代までの連続した時間」の中で「言語と文化の関わりについて、多様な視点で考えたり新たな認識を深めたりする」ことを課題設定しようと試みている。そこには、日本において連綿と受け伝えられてきた言語文化が「ある」ことを、生徒たちに信じさせるに足る、創意工夫が凝らされている。

なお、紙幅の都合上、本論では取り上げることができなかったが、「言語文化」の教科書には、アダプテーションとは関わりなく、独立して「連続史観」を感得させようとする課題が、別途104例採択されていることを確認している。「連続史観」そのものに軸足を置いた課題の検証については、稿を改めて論じることとしたい¹⁷。

別表1 『言語文化』教科書別「アダプテーション」課題数

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	計
	メディア	現代化	リイト	翻訳	本歌	比較	事例	
東書	1	2	1	4	2	7	5	22
新編言語文化	1	1	1	2	1	3	2	11
精選言語文化		1		2	1	4	3	11
三省堂		2	5	1	1	6	5	20
新言語文化		1	3	1		2	3	10
精選言語文化		1	2		1	4	2	10
大修館	1	2		2		9	12	26
言語文化		1				5	6	12
新編言語文化	1	1		2		4	6	14
数研		4	6	3	2	14	8	37
言語文化		2	1	1	1	6	2	13
高等学校言語文化		1	2	1	1	6	4	15
新編言語文化		1	3	1		2	2	9
文英堂		1				1	1	3
言語文化		1				1	1	3
明治	7		2	2		2	1	14
精選言語文化	7		2	2		2	1	14
筑摩	3	1	2	2		6	2	16
言語文化	3	1	2	2		6	2	16
第一	1	4	6	1		7	4	23
高等学校言語文化		1	3			1	1	6
高等学校新編言語文化		1	1			1	1	4
高等学校精選言語文化	1	1	1			3	1	7
高等学校標準言語文化		1	1	1		2	1	6
桐原	2	4	3			4	1	14
探求言語文化	2	4	3			4	1	14
計	15	20	25	15	5	56	39	175
比率	9%	11%	14%	9%	3%	32%	22%	100%

別表2 『言語文化』教科書に採用された「アダプテーション」課題一覧(1/5)

番号	出版社	教科書名	文学掲載作品	課題	種類
1	東書	新編言語文化	・芥川龍之介「羅生門」	書き足し(続き)	③
			・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・「古典から生まれた近現代小説を読む」	翻案小説の紹介	⑦
			・枕草子「うつくしきもの」	現代版「〇〇もの」を書く	②
			・『源氏物語』	翻案漫画との比べ読み	⑥
			・「短歌を作る」	本歌取りを用いた短歌の創作	⑤
			・「和歌を自分の言葉で書き換える」	創作的現代語訳	④
			・伊勢物語「筒井筒」	派生作品の紹介	⑦
			・「訳詩を書く」	複数の和訳詩の比べ読み	⑥
			・「訳詩を書く」	漢詩→和訳詩	④
			・『三国志』の英雄ポスターを作る	中国史話→ポスター	①
2	東書	精選言語文化	・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・徒然草「九月二十日のころ」	派生作品(絵)との比較	⑥
			・枕草子「ありがたきもの」	現代版「〇〇もの」を書く	②
			・枕草子のパロディ	派生作品の紹介	⑦
			・伊勢物語と絵画・工芸	派生作品の紹介	⑦
			・「短歌を作る」	本歌取りを用いた短歌の創作	⑤
			・「受け継がれる『平家物語』」	派生作品の紹介	⑦
			・「奥の細道」「俳句の翻訳」	2種類の英訳の比べ読み	⑥
			・「奥の細道」「俳句の翻訳」	俳句→英訳	④
			・「訳詩を書く」	複数の和訳詩の比べ読み	⑥
			・「訳詩を書く」	漢詩→和訳詩	④
3	三省堂	精選言語文化	・枕草子「ありがたきもの」	現代版「ありがたきもの」を書く	②
			・竹取物語	派生作品の調査	⑦
			・「和歌の修辞」	本歌取りを用いた短歌の創作	⑤
			・平家物語「木曾の最期」	派生作品の調査	⑦
			・「漢詩」	和訳詩との比べ読み	⑥
			・芥川龍之介「羅生門」	書き足し(続き)	③
			・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・角田光代「レッスン」	書き換え(視座転換)	③
			・「近代詩と翻訳詩」	外国詩と和訳詩の比べ読み	⑥
			・「近代詩と翻訳詩」	和歌と英訳の比べ読み	⑥

別表2 『言語文化』教科書に採用された「アダプテーション」課題一覧(2/5)

番号	出版社	教科書名	文学掲載作品	課題	種類
4	三省堂	新言語文化	・枕草子「ありがたきもの」	現代版「〇〇なもの」を書く	②
			・枕草子	派生作品の紹介	⑦
			・芥川龍之介「羅生門」	書き足し(続き)	③
			・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・伊勢物語と源氏物語	派生作品の紹介	⑦
			・「言語文化の継承と創造」	書き換え(詩歌→物語)	③
			・宮下奈都「オムライス」	書き換え(視座転換)	③
			・三国志	派生作品の紹介	⑦
			・「翻案:漢詩から詩へ」	漢詩→和訳詩	④
			・方丈記	英訳との比べ読み	⑥
5	大修館	言語文化	・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・「翻案の世界」	翻案の定義と例	⑦
			・ヘミングウェイ「橋のたもと」の老人」	原文と訳文の比べ読み	⑥
			・中原中也「サーカス」	英訳との比べ読み	⑥
			・今昔物語集	派生作品を調べる	⑦
			・古典説話	古典→現代の物語	②
			・「四季の移ろい」	見立ての解説	⑦
			・伊勢物語「あづま下り」	和歌の英訳との比べ読み	⑥
			・源氏物語	派生作品の紹介	⑦
			・平家物語	派生作品の紹介	⑦
			・中島敦「山月記」	原典との比べ読み	⑥
			・中島敦「山月記」	中国小説→日本の翻案作を調べる	⑦
			6	大修館	新編言語文化
・今昔物語集	派生作品の紹介	⑦			
・菊池寛「形」	原典との比べ読み	⑥			
・樋口一葉「たけくらべ」	現代語訳との比べ読み	⑥			
・「詩歌の調べ」	詩歌→創作的翻訳	④			
・宇治拾遺物語「児のそら寝」	古典→朗読劇	①			
・今昔物語集「阿蘇の史、盗人」	落語「蔵前駕籠」との比べ読み	⑥			
・枕草子「春はあけぼの」	古典→現代語訳・英訳	④			
・枕草子「春はあけぼの」	派生作品の紹介	⑦			
・枕草子「春はあけぼの」	夏秋冬の現代版を書く	②			
・伊勢物語	派生作品の紹介	⑦			
・平家物語	派生作品の紹介	⑦			
・三国志	派生作品の紹介	⑦			
・物語のいろいろ	古典の派生作品の紹介	⑦			

別表2 『言語文化』教科書に採用された「アダプテーション」課題一覧(3/5)

番号	出版社	教科書名	文学掲載作品	課題	種類
7	数研	言語文化	・大和物語「沖つ白波」	伊勢物語「筒井筒」との比べ読み	⑥
			・大和物語「あづさ弓」	古典→現代語の物語	②
			・伊勢物語	派生作品の紹介	⑦
			・枕草子「ありがたきもの」	現代版「ありがたきもの」を書く	②
			・枕草子	派生作品の紹介	⑦
			・三大和歌集	和歌を本歌とする短歌の創作	⑤
			・奥の細道「平泉」	句の初案と定稿の比べ読み	⑥
			・在原業平「ちはやぶる神代もきかず…」	英訳詩との比べ読み	⑥
			・在原業平「ちはやぶる神代もきかず…」	英訳を再度日本語に訳す	④
			・芥川龍之介「羅生門」	初稿と定稿との比べ読み	⑥
			・芥川龍之介「羅生門」	書き足し(続き)	③
			・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・中島敦「山月記」	原典との比べ読み	⑥
			8	数研	高等学校言語文化
・伊勢物語	「昔男」の系譜の紹介	⑦			
・伊勢物語	派生作品の紹介	⑦			
・枕草子「ありがたきもの」	現代版「ありがたきもの」を書く	②			
・枕草子「ありがたきもの」	派生作品の紹介	⑦			
・おくのほそ道「平泉」	和歌の初稿と定稿との比べ読み	⑥			
・在原業平「ちはやぶる神代もきかず…」	英訳詩との比べ読み	⑥			
・在原業平「ちはやぶる神代もきかず…」	英訳詩を再度日本語に訳す	④			
・芥川龍之介「羅生門」	初稿と定稿との比べ読み	⑥			
・芥川龍之介「羅生門」	書き足し(続き)	③			
・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥			
・武田綾乃「側転と三夏」	書き換え(タイトル)	③			
・中島敦「山月記」	原典との比べ読み	⑥			
・河上肇の漢詩	王維の漢詩との比べ読み	⑥			
・新古今和歌集	本歌取りを用いた短歌をつくる	⑤			
9	数研	新編言語文化			
			・芥川龍之介「羅生門」	書き足し(続き)	③
			・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・武田綾乃「側転と三夏」	書き換え(タイトル)	③
			・伊勢物語「芥川」	和歌→現代短歌	②
			・伊勢物語「筒井筒」	派生作品の紹介	⑦
			・「東下り」	派生作品の紹介	⑦
			・「和歌を訳す」	和歌→創作的翻訳	④
			・落語「まんじゅうこわい」	原典との比べ読み	⑥
			10	文英堂	言語文化
・枕草子「類聚的な章段」	「ものづくし」で随筆を書く	②			
・平家物語「木曾の最期」	派生作品の紹介	⑦			

別表2 『言語文化』教科書に採用された「アダプテーション」課題一覧(4/5)

番号	出版社	教科書名	文学掲載作品	課題	種類
11	明治	精選言語文化	・伊勢物語「梓弓」	書き換え(視座転換)	③
			・平家物語「木曾の最期」	古典→脚本→演じる	①
			・「文学と芸能」	古典の派生作品の紹介	⑦
			・世説新語「断腸」	故事成語→小話	①
			・「現在も使われる故事成語」	故事成語→五・七・五	①
			・芥川龍之介「羅生門」	書き足し(続き)	③
			・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・「羅生門」 「城の崎にて」	小説→模擬裁判→演じる	①
			・梅崎春生「写真班」	小説→漫画	①
			・梅崎春生「写真班」	小説→コント	①
			・川上弘美「離さない」	小説→人魚の絵を書く	①
			・「俳句の英訳」	原典と英訳との比べ読み	⑥
			・「俳句の英訳」	英訳を日本語に訳し直す	④
			・「俳句の英訳」	例とは異なる英訳を考える	④
12	筑摩	言語文化	・十訓抄「大江山」	古典→4コマ漫画	①
			・「竹取物語」と「かぐやひめ」	原典と絵本との比べ読み	⑥
			・「竹取物語」と「かぐやひめ」	派生作品の調査	⑦
			・「歌物語」を作ろう	詩歌→歌物語	①
			・異なる語り手を設定して書き換える	書き換え(視座転換)	③
			・古典を一人称の日記文学に書き換える	物語→日記文学	①
			・方丈記・冒頭	歎逝賦(文選)との比べ読み	⑥
			・新古今和歌集	歌と本歌との比べ読み	⑥
			・孟浩然「春暁」	井伏鱒二・土岐善麿の翻訳との比べ読み	⑥
			・孟浩然「春暁」	唐詩→翻案詩	④
			・芥川龍之介「羅生門」	書き足し(続き)	③
			・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・翻訳文学というジャンル	翻訳文学の紹介	⑦
			・ティム・オプライエン「待ち伏せ」	原文と翻訳との比べ読み	⑥
			・想像力がひろく世界	逐語訳して村上春樹訳と比較	④
			・想像力がひろく世界	古典や英文学→現代小説	②
			13	第一	高等学校言語文化
・伊勢物語「芥川」	派生作品(絵)との比較	⑥			
・徒然草「丹波に出雲といふ所ありけり」	書き足し(続き)	③			
・平家物語「木曾の最期」	書き足し(せりふ)	③			
・和歌を現代の言葉で書き換える	和歌→現代の言葉	②			
・短歌を文章に書き換える	短歌→文章	③			

別表2 『言語文化』教科書に採用された「アダプテーション」課題一覧(5/5)

番号	出版社	教科書名	文学掲載作品	課題	種類
14	第一	高等学校精選言語文化	・芥川龍之介「羅生門」	原典と比べ読み	⑥
			・短歌を文章に書き換える	短歌→文章	①
			・「古典から受け継がれる話の由来を調べる」	昔話の原典を調べる	⑦
			・伊勢物語「芥川」	派生作品(絵)との比較	⑥
			・大和物語「沖つ白波」	伊勢物語「筒井筒」との比べ読み	⑥
			・平家物語「木曾の最期」	書き足し(せりふ)	③
15	第一	高等学校標準言語文化	・宮下奈都「よるこびの歌」	書き換え(視座転換)	③
			・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・「古典から受け継がれる話の由来を調べる」	昔話の原典を調べる	⑦
			・平家物語「宇治川の先陣」	複数の翻訳の比べ読み	⑥
			・和歌を現代の言葉で書き換える	自分なりに工夫した翻訳	④
			・和歌を現代の言葉で書き換える	和歌→現代の言葉	②
16	第一	高等学校新編言語文化	・宮下奈都「よるこびの歌」	書き換え(視座転換)	③
			・芥川龍之介「羅生門」	原典との比べ読み	⑥
			・「古典から受け継がれる話の由来を調べる」	昔話の原典を調べる	⑦
			・和歌を現代の言葉で書き換える	和歌→現代の言葉	②
17	桐原	探求言語文化	・宇治拾遺物語「児のそら寝」	古典→現代の物語	②
			・沙石集「花盗人の歌」	和歌→手紙文	①
			・沙石集「鷹使いの見た夢」	書き足し(手紙文)	③
			・枕草子「ありがたきもの」	現代版「ありがたきもの」を書く	②
			・土佐日記「門出」	書き換え(視座転換)	③
			・伊勢物語「芥川」	和歌→口語自由詩	②
			・伊勢物語「東下り」	歌物語→日記	①
			・伊勢物語	派生作品の紹介	⑦
			・伊勢物語「梓弓」	書き足し(手紙文)	③
			・奥の細道「平泉懐古」	俳諧紀行文を書く	②
			・唐物語「簫史と弄玉」	原典との比べ読み	⑥
			・伽婢子「怪を語れば怪至る」	原典との比べ読み	⑥
			・芥川龍之介『羅生門』	初稿と定稿との比べ読み	⑥
			・芥川龍之介『羅生門』	原典との比べ読み	⑥

【凡例】

- ①メディア： 異なるメディアに展開される翻案
- ②現代化： 古典を現代の物語に置き換えるような翻案
- ③リライト： 文章の一部の書き換え・書き足し
- ④翻訳： 逐語訳ではない創作的翻訳
- ⑤本歌： 「本歌取り」を用いた和歌の創作
- ⑥比較： 翻案作品と原典との比べ読み

注

- ¹ 高校国語における「連続史観」の台頭については、拙稿「高校国語「言語文化」における現代と古典の架橋—教科書論争が見落とした〈連続史観〉の前景化—」(『日本文学研究』第63号(2024年2月))を参照されたい。
- ² 詳細については、以下の拙稿を参照されたい。「国語教育とアダプテーション—高校「国語総合」教科書の「創作」課題の検証—」『大東文化大学教職課程センター紀要』第3号 2018年12月、「高校国語におけるアダプテーション—新指導要領(令和4年実施)における改善点—」『大東文化大学教職課程センター紀要』第6号 2021年12月、「日本文学の〈伝統〉としてのアダプテーション—国語教育における連続史観へのパラダイムチェンジ—」『日語教育と日文学研究』第19号 2022年12月
- ³ Linda Hutcheon “A Theory of Adaptation” (2006年)
- ⁴ Julie Sanders “Adaptation and Appropriation” (2006年)
- ⁵ 森直香「白雪姫のアダプテーション—ベルヘル『ブランカニエベス』(2012年)」『イバニカ』第63号(2019年) 93-113頁
- ⁶ 坂東敏子「見立て考：上代より近世までの日本文化における〈見立て〉の歴史的展開およびその本質的性格を考察する」『美学・美術史学科報』第5号 1977年3月 42-61頁
- ⁷ 丸谷才一『日本文学史早わかり』講談社、1978年
- ⁸ 大岡信『あなたに語る日本文学史』角川出版 1995年
- ⁹ 小峯和明『日本文学史』吉川弘文館、2014年 35-36頁
- ¹⁰ 全17冊の内、第一学習社『高等学校 言語文化』だけには芥川龍之介「羅生門」の掲載がない。しかしながら、同社のもう一方の共通必修教科書である『高等学校 現代の国語』の方に掲載がある。このため、実質すべての教科書に「羅生門」の掲載があるとみなせる。
- ¹¹ 本歌取りや折句などを用いて、感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり、伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで、随筆などを書いたりする活動。
- ¹² 有吉保編『和歌文学辞典』(1982年)
- ¹³ 小林路易「パロディと本歌取り」『比較文学年誌』第11号 1975年3月 1-21頁
- ¹⁴ 青木美智雄「近世庶民文化史 日本文化の原型」『全集 日本の歴史 別巻』小学館 2009年 22-23頁
- ¹⁵ 小説を、脚本や絵本などの他の形式の作品に書き換える活動。
- ¹⁶ 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に置き換えたりすること。
- ¹⁷ 注1に同じ

(付記) 本研究はJSPS 科研費 20K02892 の助成を受けたものです。